

G・O・ロスニー『ニューファンランドの歴史』（下）

細川道久（訳）

「リヴァイアサン」の復活

対仏戦争の短い合間に、スチュアート家の国王の意思に唯一基づいていたウェスタン・チャーターは、議会法にとって代わられた（1699年）。その目的は、いぜんとして「ニューファンランド貿易の促進」にあったが、小さな新機軸が2つ盛り込まれており、それは住民の助けとなった。1685年以降に漁のための設備——「同年以降、漁船には所属していない設備」——を建てた者は誰でも、「以後も安心して支障なくそれを所有」できたのである。後に（1728年）それは相続や売却の権利のない「生存中に限ったの財産」を意味するよう規定された。だが、かなり限定的とはいえ、いわゆる私的財産が法的に認められたのである。さらに重要なのは、漁船団長の決定を「ニューファンランドの護送船団として任命された国王部隊の軍艦の指揮官」に上訴できるようになったことである。「ウィリアム王の法(King William's Act)」として知られるこの法律は、18世紀を通してニューファンランドの基本的な憲政文書となった。

1705年、フランスの襲撃によって、イングランド人の入植地がことごとく破壊された。もっとも、ウィリアム砦はセントジョンズの守備隊によって奇跡的に死守された。1708年には、この砦までもが奪われ、司令官はフランスの監獄に移送され死亡した。アイルランド人移民は、イングランド人を好む理由はなかったため、フランスに味方した。入植地はことごとくルイ14世に従った。彼は、イングランドの軍艦がたまたま現れたときを除けば、一時的に「テール・ヌーヴ（ニューファンランド）」全域の支配者であった。だが、他の地域では、イギリスが勝利を収めていた。ユトレヒト講和条約（Peace of Utrecht）（1713年）によって、フランスは、ポール・ロワイヤル（アナポリス）とブレザンス（プラセンシア）を放棄した。だがフランスは、ラブラドルをニューフランスの1部として保持したほか、東のボナヴィスタ岬と西のポイント・リーシュ（Point Riche）の間のニューファンランド北部での魚を干す権利も維持した。

セントジョンズのイギリス守備隊は、ノヴァスコシア総督の指揮下におかれ、プラセンシアに移された。当時のイングランド人兵士はきわめて貧相であった。副総督（lieutenant-governor）に率いられた彼らは、新しい境遇で混乱をもたらした。セントジョンズの方では、数名のニューイングランド人が少しずつ主導権を握ろうとしていたが、騒擾や殺人は日常茶飯事であった。

1713年以降1世代の間、カナダが平和を享受していたのに対して、ニューファンランドの状況は墮落のどん底にあった。公式報告書に満ちあふれていたのは次のような文言だった——「ことごとく無秩序で統御不能」、「常時、違いを互いに競い合っている」、「強い酒が好きで、義務不履行が頻繁に起きている」、「世界中でも最も悲惨な貧困状況」、「奴隷や黒人の状況以上に悲惨な」状態、「故意で公然と殺人が起きるような墮落極まりない状況」。王立協会（ロイヤル・ソサエティ）（Royal Society）の会長を長年務めることになるサー・ジョゼフ・バンクス（Sir Joseph Banks）が植物採

集のためにニューファンドランドを訪れた1766年になっても、「私が思うに、セントジョンズに匹敵するような、あらゆる墮落と不潔がはびこっている処はないだろう」と明言するほどだった。

1728年、当時としては珍しいほど有能な指揮官であったヴェア・ボークレア卿 (Lord Vere Beauclerk) が、この地〔ニューファンドランド〕の悲惨さの元凶は「冬期に治安を維持する権限が誰にも与えられていないことにあり」、プラセンシアの駐屯軍の副総督に秩序維持を担わせられるような何らかの方策が必要だと報告した。これを読んだ国務相ニューカースル公爵 (Duke of Newcastle) は、ニューファンドランドをノヴァスコシアから分離し、独自の総督の下におくことを即座に決定した。議員であったヴェア卿には資格がなかったため、1729年、彼の護送船団の士官の1人であったヘンリー・オズボーン船長 (Captain Henry Osborn) が「船舶が寄港している期間中」、初のニューファンドランド総督 (royal Governor of Newfoundland) になった。もっとも彼は、護送船団の指揮官であるヴェア・ボークレア卿の命令にいぜんとして従わねばならなかった。彼はまた、プラセンシアの駐屯軍の総司令官にも任命された。

新総督が最初に行なったのは、国家の根本的な目的とは、威圧によって秩序を維持すること、つまり、ジョン・ロック (John Locke) が論じたように、生命、自由、財産を守るためには威圧は必要悪であることを示すことだった。1729年、オズボーンは、ボナヴィスタとプラセンシアの間に6つの地区 (districts) を設け、17名の治安判事 (justices of the peace) と13名の治安官 (constables) を配置した。「セントジョンズとフェリーランドのそれぞれの地区に監獄を建設するため」税率引き上げの命が下され、建物が数棟建てられた。状況は改善しはじめたが、非常に緩やかだった。ウェスト・カントリーの漁船団長は、いまだに鞭打ち刑を命じており、自分よりも権威の劣る「冬期の裁判官 (winter justices)」を軽蔑した。オズボーンは、「これらの為政者はどんなに優れた者でも卑しい」と理解していた。犯罪事件の場合、裁判のためイングランドに (現地の費用で) いぜんとして送らねばならず、未決囚裁判 (jail deliveries) は冬期に行なわれた。刑事法廷を主宰する権限が総督に与えられたのは、1750年になってのことだった。翌年には、絞首台を設置する権限も与えられた。

海軍省によって護送船団の指揮官として任命された者が自動的に総督になるのが通例だった。総督の公邸は船上にあるため、春になると現われ、秋になるとなくなった。護送船団の主たる集結地はセントジョンズの湾であったため、(プラセンシアではなく) そこが1729年以降の「首都」になった。現地で規制することが総督にとって望ましいと思われるときに限って、布告が出された。彼の布告は法律とみなされた。この法執行手続きがもつ法的権限については疑わしかったが、「リヴァイアサン」が戻ってきて自己主張をしはじめたのは疑いもないことだった。

布教師と「判事代理」

優勢なイギリスの海上権力によって1760年にモンリオールがついに陥落すると、フランスは、漁場に対する警戒を強めて海軍を派遣し、1762年には11週間にわたってフェリーランドからトリニティ (Trinity) までの沿岸を占有した。このため、現在のカナダの地において最後にフランスの旗が下ろされたのは、「サン・ジャン・ドゥ・テール・ヌーヴ (Saint-Jean-de-Terre-Neuve)」〔ニュー

ファンドランドのセントジョンズ]においてであった。パリ条約 (Treaty of Paris) (1763年) によって、フランス人漁師の避難場所として、ケープ・ブレトン (Cape Breton) と引き換えに、50年間イギリスの支配下にあった南部沿岸のサン・ピエール (Saint-Pierre)、ミクロン (Miquelon) 両島がフランスに割譲された。カナダの1部であるラブラドルはイギリスが獲得した。ベル・アイル海峡 (Strait of Belle Isle) に「十分な数の巡洋艦が停泊」していなければ、「フランスが沿岸部のインディアンとの旧来からの交易の恩恵を受け続けるのではないか」と懸念された。そのため、1763年4月25日、国務相エグレメント卿 (Lord Egremont) は、アンティコスティ島 (Anticosti Island) からハドソン海峡 (Hudson Strait) までの「ラブラドル沿岸 (the coast of Labrador)」をニューファンドランド総督グレーヴズ (Graves) の下においた。

1764年、きわめて反動的な総督ヒュー・パリサー (Hugh Palliser) によってウェスト・カントリーの独占を復活させようとする途方もない試みが始まった。カナダ側の抗議を受けた彼は、大胆な政策によって1774年にラブラドルからケベックまでの沿岸一帯を奪還したが、これはアメリカ独立戦争の引き金の1つになった。1783年の諸条約によって、フランス人とニューイングランド人はともに、パリサー総督の厳格な政策によってはく奪されていたニューファンドランド漁場での特権のほとんどを取り戻した。ニューファンドランドとイングランドの漁師たちは、今やボナヴィスタ湾 (Bonavista Bay) とノートルダム湾 (Notre Dame Bay) を活用していたため、フランスはそれに代わって、ニューファンドランド西海岸全域での魚の乾燥を行なう自由を与えてほしいと要求した。フランス海岸の新しい境界は、東はセントジョン岬 (Cape St. John)、南西はレイ岬 (Cape Ray) であった。さらにイギリスは、「条約海岸 (treaty shore)」への入植を認めないとする宣言を初めて出さざるをえなかった。そのため、ニューファンドランドを他の英領北アメリカ側に向けさせたかもしれない農業に最も適した土地を含む、ニューファンドランド西部の開発は、1904年にフランスが英仏和親協定 (*Entente cordiale*) [英仏協商] の条項に基づきその沿岸部の使用权を放棄するまで手つかずのままだった。

18世紀末までにニューファンドランドには3つの主要な宗派がすべておかれるようになった。イギリス、フランス、アメリカの諸政府は、魚には関心を示しても、英語系ニューファンドランド住民の福祉には無関心であった。これに対して、当時救いを受けるにはあまりにも墮落していた多くの人々を救済することだけを望んだ少数の聖職者が、長年の無政府状態、迫害、戦争によって不快で危険極まりない土地に進んで住もうとした。(1703～05年、セントジョンズ駐屯軍初の品位のない従軍牧師を助けたという不幸な出来事の後) 1726年、イングランド国教会の福音伝道協会 (Society for the Propagation of the Gospel) が、ヘンリ・ジョーンズ師 (Rev. Henry Jones) —— ロンドン主教によってボナヴィスタに派遣され、ニューファンドランド初の学校を創った—— を支援することで、入植者に対して恒久的な布教活動を開始した。1730年、セントジョンズとトリニティ湾の2か所の布教活動にも支援が行なわれた。

1742年、海軍の従軍牧師は、非国教徒のニューイングランド人がいるにも関わらず、セントジョンズの人々は「プレズビテリアンの教師に教えを受けるよりは、無知のままにいる方を望んでいる」と満足げに報告していた。だが1765年には、ジョン・ウェスリー (John Wesley) によるアイルラ

ンド人改宗者の1人であるローレンス・コグラン (Lawrence Coughlan) がハーバー・グレースに赴き、現在のカナダの地で最初のメソジスト会を創設した。1776年、彼はイングランド国教会の布教師だとみなされていた。カーボニアベイ・ドゥ・ヴェルデ (Carbonear-Bay de Verde) 地域を通して北方までウェスリー主義 (メソジスト主義) (Wesleyanism) を広め、彼がそこを離れた後も、ウェスリー自らがカーボニアに布教師を派遣する1785年まで平信徒によって信仰が守られた。その頃になると、カナダ合同教会ニューファンドランド教会 (Newfoundland Conference of the United Church of Canada) の前身である独特な宗派が置かれはじめた。

最も不幸な時期の打ちひしがれたアイルランドの人々を支えたローマ・カトリックの聖職者たちは、漁師として身を隠してやっとニューファンドランドにやってくるのができた。だが1770年には、アイルランドのアウグスティノ会士 (Augustinian) であるケイン神父 (Father Cain) がブラセンシアでの布教を許され、1784年には、アイルランドのフランシスコ会士 (Franciscan) J・L・オドネル師 (Rev. J. L. O'Donel) がローマ教皇 (Holy See) に直属の「ニューファンドランド島伝道修道院長 (Superior of the Mission of the Island of Newfoundland)」に任命された。

宗派への所属は、ある程度は人種的出自でも決まったが、布教活動によるところもあった。〔現在では、〕アヴァロン半島の南半分と西海岸の南側は、圧倒的にローマ・カトリックであり、南海岸の西側は国教会 (Anglican)、ノートルダム湾は合同教会と救世軍 (Salvation Army)、がそれぞれ大多数を占めている。学校も当初は教会によって建てられていたが、その伝統は続き、19世紀に制度化され、いぜんとしてこの制度の下で、州政府は、公立学校を統括する地方の教育委員会を宗派を基礎にして任命している。

入植者に対する政府の姿勢は、教会とは非常に異なっていた。アメリカ革命によっても、それは変わらなかった。1789年、内務相ウィリアム・グレンヴィル (William Grenville) が「ニューファンドランドは、全くもってイギリス植民地ではない」と公言していた。イングランドの関税管理官がつけている帳簿では、ニューファンドランドは外国に分類されていた。ノース卿 (Lord North) は、住民に関して総督が受けた通達を要約して、「彼らが焼くのを好むものは何であれ、生のまま与え、彼らが生を好むものは何であれ、焼いて与えよ」と述べていた。

しかし、総督らの報告が伝えていたのは、(セントジョンズの少数を除く) 入植者たちが、彼らの財産が借財状によってウェスト・カントリー商人の手に渡ってしまっており、彼らは退去はできないということだった。この状況は、人々を代理人から守るような民事法廷がないことには変えられないと、総督らは上申ししていた。そこで、1792年の裁判法 (Judicature Act) では、「船乗りの養成場」に資するため、民事法制に関する「判事代理 (surrogate)」——「判事代理」には、総督の指揮下にある船舶の海軍将校が就いた——法廷を設け権限を総督に与えた。漁業よりも貿易に関心を持ちつつあったウェスト・カントリーの諸港は、同法に激しく反対した。だが、この頃には、ニューファンドランドに関する政策を管轄したのは、諸港ではなく、イギリス海軍省であった。

市民政府の発展

フランス革命が勃発したことで、ニューファンドランドからの住民の退去を奨励する政策に対す

るイギリス政府の関心は再びそがれてしまった。アンティコステイ島（一帯を含む）からハドソン海峡までのラブラドル沿岸をニューファンドランド政府が再併合することは戦略上望ましかった。しかも、カナダ側が領有するアザラシ交易所を守れる法廷がニューファンドランドにはあったため、1809年にロワーカナダ（Lower Canada）から移譲された。だが、状況は、他の英領北アメリカが享受していた植民地としての地位にははるかに及ばなかった。ホップズ流の「リヴァイアサン」が極めて必要であったが、時代の趨勢は、ロック流の「市民政府の発展」へと向かっていた。1812年、ウィリアム・カーソン（William Carson）というスコットランド人医師が、代議政体を要求するセントジョンズ義勇軍（St. John's Volunteers）に入ったため、軍医を解雇された。

1817年には、総督が冬期にも留まることが決められ、公的にニューファンドランドは夏期の漁場以上になった（もっとも、それを試みた最初の総督は2月に死亡した）。だが、何千人もの住民がアイルランドやプリンスエドワード島（Prince Edward Island）に船で運ばれており、1819年にChief Justice（首席裁判官）フォーブズ（Forbes）が、無制限な領有を求める申し立てに対して、漁業以外の目的での領有を合法とする判決を下すまでは、家屋は「漁業」の利害のために破壊され続けていた。1637年以来初めて、ニューファンドランドの住民は、自分たちの家屋を私的財産としてみることができたのである。

1820年に起きた海軍の「判事代理（surrogate）」の命による極めて残酷な鞭打ち事件の後に、ウィリアム・カーソンとパトリック・モリス（Patrick Morris）（アイルランド人弁士）が煽動活動を率い、その結果、1824年にニューファンドランドをイギリスの植民地として議会によりやく認めさせた。「判事代理」に代って巡回裁判や文官判事がおかれ、ウェスタン・チャーターを受け継いできた旧来の規則が撤廃され、個人の財産所有が認められた。さらに、社会状況を改善するために、教師や非国教会布教師（国教会（Holy Orders）の人々はもとより）による婚儀の執行が許可された。1825年、総督に助言を行なう評議会（Council）が初めて任命された。同年には、ニューファンドランドとケベックの間のラブラドル海岸の現在の区画が決められた。アンティコステイ島から（ベル・アイル海峡の）アンス・サブロン（Ance Sablon）までの地域には、ニューフランスの時代に造られた領地が含まれていた。そのため、同地域が、（イングランドよりは）フランスの民法がいぜんとして適用されているロワーカナダに復帰することは理にかなっていた。

1832年、ニューファンドランドは、ノヴァスコシアが1758年に実現していた代議政体（representative government）を獲得した。総督、評議会（総督評議会）、および選挙制の議会（General Assembly）によって、法律が制定されることになった。最初の議会は保守的であったが、やがて評議会の無謀な妨害を受けたため、激しい不満を引き起こした。とくに1833年以降、アッパーカナダ（Upper Canada）の「家族盟約（Family Compact）」に属する首席裁判官ヘンリ・ジョン・ボールトン（Henry John Boulton）が評議会議長になってからはそうだった。1837年、2度目の総選挙で、改革派の指導者ウィリアム・カーソンが議会の議長に就任した。

1838年、ダラム卿（Lord Durham）が、全英領北アメリカの総督になった。彼も、ニューファンドランドのかなり民主的な議会も、政治的平等と政治的統合は同時に進められると考えていた。「人民による統治」である民主政とは、どこであれ、その土地の人民がまずは政治的に結束してい

ることを意味している。論理的には、民主主義者は統合論者 (unionist) でなければならない。議会は、ダラム卿に対する声明の中で、「ニューファンドランドと他の諸植民地が、ヨークシャー (Yorkshire)、エディンバラ (Edinburgh)、コーク (Cork) のように、連合王国の1部を構成できないという理由はないと考える」と述べていた。ダラムは、自身の『報告書 (Report)』〔『英領北アメリカ情勢に関する報告書 (Report on the affairs of British North America)』(1839年)の中で、プリンスエドワード島とニューファンドランドにとって、北アメリカのイギリス領植民地の統合は「植民地の諸利害に対して関心をしっかり向けさせる唯一の方策として、絶対に必要である」と言明していた。しかし、ニューファンドランドはイギリスとカナダの間の海洋に位置してバランスをとっており、イギリスがこの提案を考慮するには至らなかった。ダラム卿の提案が実現するのは、飛行機旅行や原子力エネルギーによって、カナダがおかれていた1839年の状況よりも世界全体がぐんと小さくなった1世紀以上も後のことであった。

1842年、政治的行き詰まりを打開するために政体機能が停止された。評議会のメンバーは代議制議会のメンバーと同じ院内におかれ、その結果、改革派は極めて少数派におかれた。1843年、その領袖ウィリアム・カーソンは、この「合同議会 (amalgamated legislature)」の議長職争いで敗れた数週間後に死亡した。この一院制の体制は、少なくとも機能したという点で実際には前進の1歩であったが、改革派は、この前進はノヴァスコシアが進んだ道にきっかり追随するものと誤解していた。そして1848年、彼らは1832年の政治体制を復活させることに成功した。だが、それは、機能しない二院制であった。ちょうど同じ頃、カナダ、ニューブランズウィック (New Brunswick)、ノヴァスコシアでは、一院にのみ責任を負う統治案が適用されつつあった。

ニューファンドランドの改革派である自由党 (Liberals) は、近隣の植民地に倣って、「責任政府 (responsible government)」の原則——選挙制議会の信任が得られるような行政府顧問を選任することが総督に求められる原則——を既存の代議政体に付け加えるよう、ついに要求し始めた。総督K・B・ハミルトン (K. B. Hamilton) の激しい反対にも関わらず、イギリス当局は、新たに選挙が実施されればすぐにこの原則を実施すると言明した。もはやローマ・カトリックはニューファンドランドで多数派ではなかったため、1855年、保守党 (Conservatives) は、プロテスタントの結末に訴えた。これに対して自由党は、商人階級による支配を攻撃した。ローマ・カトリックの選挙区はすべて自由党を支持した一方、メソジスト派の選挙区 (ベイ・ドゥ・ヴェルデ) とその他プロテスタントの地区では保守党を選んだ。だが、勝敗を決したのは、(ほとんどが国教会である)ハーバー・グレースと (どの3宗派も多数派ではない) カーボネア (Carbonear) とビュリン (Burin) であった。これら3つのプロテスタント選挙区では、自由党5名全員が当選した。

責任政府が始まったのは1855年5月22日で、このためにチャールズ・ヘンリー・ダーリング (Charles Henry Darling) が統治を任じられた。初代の首相 (Premier) になったのはフィリップ・フランシス・リトル (Philip Francis Little) であった。プリンスエドワード島生まれで、アイルランドからの政治難民で敬虔なローマ・カトリック教徒の息子であった彼は、内閣に2人のプロテスタントを入れるよう気を配った。総督評議会 (Governor's Council) は廃止された。新政体の下で立法府を構成したのは、総督、立法評議会 (Legislative Council) (首相の指名に基づき終身任命)、そし

て、従来と同じく、選挙制議会であった。さらに、総督に助言するための行政評議会 (Executive Council) と呼ばれる新しい組織が設けられた。同評議会のメンバーは首相によって指名されたが、最も重要なことは、同評議会が選挙制議会に「責任を負う」、つまり、議会議員の多数の支持が得られなくなった場合には職を失うか、総選挙で多数の支持を得るために選挙区に訴えるかしかないことが了解されていたことだった。(総督を除く、行政評議会のメンバーは、後に「内閣 (cabinet)」あるいは「政府 (government)」として知られるようになる。) かくして、イギリスによる直接統治は1855年に終止符が打たれた——首相リトルには、歳入全体の4分の1が「貧者のための支出」に費やされるという状況に立ち向かう課題が託された——。

自治領への昇格と挫折

1864年、フレデリック・B・T・カーター (Frederick B. T. Carter) (保守党) とアンブローズ・シー (Ambrose Shea) (自由党) がケベック会議 (Quebec Conference) に赴き、「連邦結成の父祖 (Fathers of Confederation)」になった。彼らは「われらの現在の孤立状態」を終わらせようと躍起になっていた。だが、セントジョンズの商業会 (Commercial Society) が、「本質的に製造業と農業の地域である両カナダ [連合カナダ植民地] はつねに保護主義政策を推進してきた。それに対して、……ほとんどの生活必需品輸入の支払いに生産物の輸出を充てているニューファンドランドは、自由貿易政策によって恩恵を受けるのだ」と即刻異を唱えた。1865年、カーターが首相になると、自党の宗派的性格を払拭し、ともにローマ・カトリックである指導的な自由党員2名 (ジョン・ケント (John Kent) とアンブローズ・シー) を入閣させた。彼は選挙には勝ったが、連邦結成問題への民衆感情は「定かではない」と認めたのだった。

大陸側からの引き (影響力) は、海洋側からの引きほどには強くなかった。セントジョンズは東に向いており、西海岸はいぜんとして「フランス海岸」の1部だった。ニューファンドランドは他の多くの国々と貿易をしたが、カナダとはさほど多くなかった。ニューファンドランドは、イギリスの方と共通点が多かったといえる。そこに1866年、トリニティ湾のハーツ・コンテンツ (Heart's Content) で大西洋横断ケーブルが結ばれるという劇的な出来事が起きた。魔法にかかったかのように、突如ニューファンドランドは、オタワ (Ottawa) という内陸の未知の都市との緊密化をめざすよりも、イギリス諸島と近くなったと感じたのである。

反連邦党 (Anti-Confederation Party) がチャールズ・フォックス・ベネット (Charles Fox Bennett) によって結成された。彼は、ニューファンドランドの富裕商人で土地投機家であり、イングランドに居住していた。過激な保守派 (Tories) であったが、ローマ・カトリックの地区すべてを掌握していた。彼ら有権者にイギリスと政治統合したアイルランドの経験を思い起こさせるのはたやすかったのである。しかも、1869年の選挙の前にカーターは、「身体が健全な貧困者を無償で救済する悪弊」を断つという単純な方策で貧困に対処しようとする社会保守主義 (social conservatism) を掲げた。これは、多くの選挙民にとって、飢餓となる可能性を意味していた。1870年、新議会に集った議員たちは「祖国の運命とともにすることを決意し」、カーター政権を19対8で打倒した。カーターはベネットを首相とすることを受け入れたが、失望した総督は、次のよ

うに応じていた。「とても重要な歴史の画期は訪れなかった。さらなる熟慮を重ねればよくなるということはないのに。最も望ましいのは、……与えられた方策をつかみ、理想的な完璧にしがみつかないことだ」と。

首相ベネットは、プロテスタント選挙民に対して、「フィニアン主義 (Fenianism) を打倒するのと同じくらい強い意志でオレンジ主義 (Orangeism) を打倒しよう」求めた。だが、カナダに本部をもつロイヤル・オレンジ協会 (Loyal Orange Association) (セントジョンズ初のロッジは1863年、初のグランド・ロッジは1870年) は、1874年に連邦支持派 (Confederates) の政権奪還を支援し、カーターが首相に復帰した。彼と後継のウィリアム・ホワイトウェイ (William Whiteway) は1865年以前は保守党であったが、連邦支持勢力の連立は「自由党」として知られるようになった——これに対する敵対政党は一般にセントジョンズ商人の支持を受けていた——。銀行破産によって保守党の短期政権が崩壊した1895年に首相となったホワイトウェイは、連邦結成に向けての交渉を再開した。だが、当時のカナダ側のマッケンジー・ボウエル (Mackenzie Bowell) 政権が政治手腕を欠いていたため、ニューファンドランドは連邦結成構想を諦めざるをえなかった。ニューファンドランドは、鉄道建設へと再び関心を向けたのである。

1900年から1909年にかけて自由党政権を率いたのは、ロバート・ボンド (Robert Bond) であった。個人的な対立がもとで、閣僚のエドワード・モリス (Edward Morris) は人民党 (People's Party) の領袖として保守党側に入った (1909年～1918年に首相)。1913年までには、モリスは、セントジョンズ・イースト (St. John's East) からセントジョージ (St. George's) までの南部一帯の政治的支持を得ていた。だが、北部では、1908年にウィリアム・コーカー (William Coaker) が設立した漁師保護組合 (Fishermen's Protective Union) (F. P. U.) の大躍進に阻まれた。存続をかけた自由党本流は、1913年総選挙の前に、漁師保護組合と政治同盟を組んだが、その結果、排除された。コーカーはボナヴィスタとトウィングート (Twillingate) のボンド (Bond) にて当選し、今や過激論者のコーカーが野党を牛耳るようになった。しかし、1917年、彼は戦時連立内閣に入った。現在の主要な諸政党は、ともにモリスの支持者であったマイケル・カシン (Michael Cashin) (1919年、首相) とリチャード・スクワイアーズ (Richard Squires) (1919～23、28～32年に首相) が1919年に各々が創設したものである。

その間、林業が台頭し、漁業に代わってニューファンドランド経済の推進役となった。1905年、ロンドンの『デイリー・メール (Daily Mail)』の経営者らが創業したイギリス・ニューファンドランド開発会社 (Anglo-Newfoundland Development Company) がグランド・フォールズ (Grand Falls) での新聞用紙工場の建設に着手し、1923年には、他のイギリスの利害が、コーナー・ブルック (Corner Brook) に2番目の用紙工場建設に乗り出した。グランド・フォールズは自治体として認可を受けず、同会社に完全に依存していたのに対し、コーナー・ブルック地域では地方自治体が複数造られ、1955年にそれらが統合してニューファンドランド第2の都市が誕生した (第1位はセントジョンズ)。

第1次世界大戦では、ニューファンドランドは陸戦、海戦のいずれにも加わった。カナダと同様に、自力で「北の自治領 (dominion of the north)」となった。1927年には北西部の領土までも獲得し、

枢密院はラブラドル沿岸のニューファンドランド領を11万2630平方マイルと規定した。ブリティッシュ・コモンウェルス・オブ・ネーションズ (British Commonwealth of Nations) の一員として (国際連盟のメンバーではなかったが)、完全な独立を有するとして1931年のウェストミンスター憲章 (Statute of Westminster) のリストに入れられた。予想以上に政治的には発展していたが——が、経済的には安定していなかった。

1929年にアメリカ合衆国の経済システムが崩壊すると、ニューファンドランドの「繁栄」も瓦解した。計画の拠り所がほとんどないと、立案はほぼ不可能である。1932年の選挙で、スクワイアーズ政権が、保守的な統一ニューファンドランド党 (United Newfoundland Party) によって追われた。オールダーダイス (Alderdice) 新政権には、後にディーフェンベーカー (Diefenbaker) [連邦] 政府の閣僚になる (1957～62年) ウィリアム J・ブラウン (William J. Browne) が入っていた。他方、敗れた自由党陣営には、ジョゼフ・R・スモールウッド (Joseph R. Smallwood) がいた。ボナヴィスタ・ノース (Bonavista North) の生まれで、叔父の好意でセントジョンズで学校教育をおえた彼は、漁師保護組合の多大な影響を受けていた。彼はコーカーを「ニューファンドランドが生んだ最も偉大な息子」と仰ぎ、「彼の声を聴くたびに、眼から涙があふれ、背筋に戦慄が走った」と記していた。コーカーも彼も、何らかの形の行政管理政府 (commission government) を主張していた。彼らが予想した通り、まもなくオールダーダイス政権は「自前の財源では公債の利子を支払えなくなった」。

1933年、王立委員会 (Royal Commission) の報告書に基づいて、議会は、自治政府 (self-government) を停止し、イギリス政府が任命し同政府に対して責任を負う行政管理政府による統治下にニューファンドランドをおくことを可決した。選挙で再選された2人の自由党員——F・G・ブラドリー (F. G. Bradley) (1949～53年にカナダ内務相 [連邦]) と R・G・スタークス (R. G. Starks) ——は、少しでも民主政治の体裁を維持しようと一連の動議を提案したが、結末の固い統一ニューファンドランド党によってことごとく否決された。

イギリスでもまた、労働党がこの提案の条項を逐一議論していた。クレメント・アトリー (Clement Atlee) は、同法案の第2読会での修正において、同法案が「競争的資本主義、取引、搾取の非効率で欠点のある制度を、社会のためになるような経済制度で置き換えるための特別な規定」をしていないと抗議した。こうした一切の修正案は、マクドナルド (MacDonald) 挙国内閣 (National Government) によって否決された。12月18日、293対52で第3読会を通過した。賛成票を投じた中には、マクドナルド、ボールドウィン (Baldwin)、チェンバレン (Chamberlain)、マクミラン (Macmillan)、ダングラス卿 (Lord Dunglass) (ダグラス・ホーム (Douglas-Home)) がおり、勿論、アトリーは反対票を投じた。この採決での「反対票の投票集計役」の1人がゴードン・マクドナルド (Mr. Gordon Macdonald) であった。1934年、2月16日、新しい体制が船出した。

カナダの州

第2次世界大戦は、ニューファンドランドの戦略的重要性を高め、カナダ、アメリカ合衆国の多数の部隊が同地に到来した。戦後になってイギリスの政権を握ったのは労働党であった。1945年、

アトリーは首相になり、1946年に、サー・ゴードン・マクドナルド（Sir Gordon Macdonald）がニューファンドランド総督になった。即座に決断が下されたのは、インドの場合と同様に、「ニューファンドランド社会の利益にかなう経済制度の整備」に向かうには、最初のステップとして、どういった社会に帰属したいのかを住民自身が決めるべきだということだった。「住民投票（national referendum）で住民に提示する統治形態の将来構想」を勧告するため、全国代表者会議（National Convention）が選出された。F・ゴードン・ブラドリー（F. Gordon Bradley）が全国代表者会議の議長となり、スモールウッドはカナダとの統合論の主唱者として頭角を現した。ニューファンドランドの空軍・海軍の基地の99年間の賃借権——1940年にアメリカ合衆国がチャーチル（Churchill）政府から受けたもの〔英米基地賃借協定（Anglo-American Leased Bases Agreement）（1941年3月27日調印）〕——は、主権国家としてのカナダには困惑材料であったが、ニューファンドランドはこれには目をつぶろうとした。だが、1948年、全国代表者会議は、行政管理政府の継続、あるいは、1934年に崩壊した旧来の政体への復帰、という構想以外の統治構想を勧告することはできなかった。イギリスは、カナダとの連邦結成（confederation）を投票にかけることを考えており、スモールウッドは、有権者に対して遊説活動を行なった。

1回目の投票では、45%〔正確には44.6%〕が独立（independence）〔自治政府（責任政府）〕を、41%〔41.1%〕が連邦加盟（confederation）を支持した。その結果、行政管理政府案ははずされ、2回目の投票は1948年7月22日に実施された。結果は、52%〔52.3%〕が連邦加盟、48%〔47.7%〕が1933年時点の政体への復帰を支持した。ハーバー・グレースからプラセンシアまでのアヴァロン半島の古くからの入植地と、セントメアリ（St. Mary）の多数は、旧来の政体への復帰を支持した。歴史の古いフェリーランド一帯は、反連邦派として最大であった。他の地域ではどこでも、カナダとの統合が多数派だった。連邦加盟支持の割合が最も高かったのはビュリナーバージョ（Burin-Burgeo）地区で、そこは1869年の時点ですらカーターを支持していた地域だった。だが、結果は僅差であり、鍵を握っていたのは、広範囲にちらばっていた、おそらくは親英派の行政管理政府支持者だった。アメリカ合衆国の大規模な基地が存在することや、アメリカ合衆国との経済統合を主張する有力な「反連邦派」の遊説活動が行なわれていたことは、コモンウェルス圏への残留を確保する唯一の方策はカナダとの統合によるしかないという考えを促したのである。

2回目の投票前に、イギリス自体が連邦加盟を支持していることが明らかにされた。連邦加盟反対論者は、まず独立を回復しておけば、ニューファンドランドは良い条件で統合の交渉が行なえると主張した。だが、1865年の経験は、遅延に対する警告となっていた。1870年には「与えられた方策をつかみ、理想的な完璧にしがみつからない」という総督ヒル（Hill）の助言は却下されたが、ついにそれが受け入れられたのである——これは、マクドナルド総督にとって大いなる喜びであった。

1949年3月31日、ニューファンドランドはカナダの州となった。翌日、スモールウッドが州首相に任命された。代議制と責任政府が回復したが、今度のはより大規模で強力な民主主義社会という文脈での復活だった。カナダと新たに結ばれたことがさまざまな形ですぐさま感じられるようになった——カナダの社会サービス、カナダの税金・関税、カナダからの補助金のほか、カナダ・ナショナル鉄道（Canadian National Railways）、カナダ放送協会（Canadian Broadcasting Corporation）、

そして、とりわけトランス・カナダ航空（Trans-Canada Airlines）と結ばれたことによる影響を通して。

以上みてきたように、ニューファンドランドが最初に沖合でのヨーロッパの国際漁業の基地になって以来の長い道のりであった。だが、アメリカ大陸から太平洋岸まで横断して広がる国家の新たな部分となったことは、数々の反動があったにも関わらず、1492年と同様に、1949年の時点でも、経済的、政治的に統合する方向へと科学的進歩が向かわせていることを想起させるものであった。ニューファンドランドにとって、カナダとの連邦結成は、その過程の重要な段階だが、終わりではない。乏しい資源しか持たないニューファンドランドにとっては、大陸側からの影響は抵抗しがたくなってきた。カナダ連邦に加盟して1週間もたたないうちに、北大西洋条約機構（North Atlantic Treaty Organization (NATO)）が創設され、カナダもメンバーになった。大陸側自体は国際世界に結びつけられているが、国際世界は、ニューファンドランドがつねに1部を構成してきた大洋によって結びつけられている。イギリス、NATO加盟諸国、アイルランド、スペインと緊密に交流することは、ニューファンドランドの伝統である。この点からすれば、今日のニューファンドランドは、カナダの全域とこれまで以上に結ばれつつある。だが、さらにそれ以上に、ソヴィエトの科学調査船や漁船がセントジョンズを頻繁に訪れたり、国際連合の会議のために往復するアジアや東欧の政治家が乗った航空機がガンダー（Gander）に頻繁に着陸することは、今やニューファンドランドが、北大西洋の従来の地平線をはるかに越えて広がる壮大な新世界に属していることを想起させている。不幸にも世界には飢餓と混乱がいぜん存在する。アメリカ人、ロシア人、イギリス人、中国人を含む人々に「畏怖の念を抱き続けさせる」のようなりヴァイアサンがひどく求められている世界である。彼らは、政府がなかったり諸政府が競合しあったりした過去の長い間、岩だらけの島の沿岸で暴力や貧困に苦しめられたニューファンドランド人に似ているのだ。

本稿は、G. O. Rothney (Gordon Oliver Rothney), *Newfoundland: A History*, Ottawa, 1953, 3rd ed., 1973. の全訳（後半部）である。前半部は、「G・O・ロスニー『ニューファンドランドの歴史』(上)」『人文科学論集』（鹿児島大学法文学部）第81号、2015年2月、である。〔 〕は訳注。訳出にあたっては、G. M. Story, W. J. Kirwin & J. D. A. Widdowson (eds.), *Dictionary of Newfoundland English*, 2nd ed. 1990, rep. Toronto, 2006. を適宜使用した。

次の拙稿は、ニューファンドランドの歴史を概観した上でニューファンドランド史研究の意義を論じた試論である。あわせて参照されたい。細川道久「島嶼部からみる歴史研究の新地平——ニューファンドランド島（カナダ大西洋岸）を題材に」『奄美ニューズレター』（鹿児島大学大学院人文社会科学研究所地域経営研究センター：WebジャーナルISSN:2186-392X）第39号、2015年3月。

【付記】 本稿は、2014～2015年度日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。

